

第15回臨床精神医学懇話会

日時: 2012年8月3日(金) 場所: ロワジュールホテル旭川

一般演題 「当院におけるFTDの治療経験」

特別講演 「認知症の診断における症候学的重要性」

一般演題 座長 猪俣 光孝 先生 医療法人社団 旭川圭泉会病院 副院長



「当院におけるFTDの治療経験」

FTDの症状を利用するアプローチが奏効した2症例

困難を伴うFTDの介護

前頭側頭型認知症 (FTD) の介護は、精神症状や行動異常により、他の認知症と比べて困難を伴うことが多いといわれる。しかし、FTD の特徴的な症状を上手く利用することで介護の負担を軽減できる可能性がある。そのアプローチは「ルーティン化療法」といい、FTD の特徴的な症状である“被影響性の亢進”や“常同行動”を用いて、他の患者とのトラブルや介護者の負担を軽減することを目的とした方法である(図)。これは前頭側頭葉変性症 (FTLD) のケアに非常に有用である。

ルーティン化療法による介護負担軽減の実例

常同的な飲酒により FTD と診断された患者に対して、退院後にほぼ毎日デイサービスに通所するという状況設定をしたところ、興味・関心が飲酒以外に向けたため常同的な飲酒に陥ることを避けられたという経験がある。また、身体愁訴、特に喉の痛みに非常にこだわり、医療機関を次々と受診して大量の薬を処方され過量服用により意識障害を起こすような常同行動を示す患者に対して、週末に家族が在宅している時間以外はデイサービスやヘルパー、ボランティアの介護など切れ目なく予定を入れてみたところ、患者の関心が身体症状以外に向くようになり、身体愁訴へのこだわりがとれた症例もあった。このように、FTD の患者に対してはルーティン化療法に類似したケアを行うことにより、常同行動が改善され、介護の負担軽減を図ることができる。

演者 田端 一基 先生

医療法人社団 旭川圭泉会病院
精神科 診療副部長



FTD の介護負担軽減への期待

ルーティン化療法は、逸脱的な常同行動をルーティン化することによって逸脱を防ぐ、つまり、治療的枠づけをする方法であるが、一度、患者の中にルーティン化療法が定着すると治療による規制を少し緩めても、ある程度の効果が持続するのではないと思われる。また、非常に強いこだわりがある行動も、短期入院などにより環境を変えることによって、患者自身は執着しなくなり、新たな常同行動を形成できるのではないとも考えられる。しかし、元の

図. ルーティン化療法

● ルーティン化療法 (routinizing therapy)

被影響性の亢進と常同行動をもちいた療法で、
前頭側頭葉変性症のケアに有用であり、
他患者とのトラブルおよび介護者の負担を軽減できる

(Tanabe H, Ikeda M, Komori K: Behavioral Symptomatology and Care of Patients with Frontotemporal Lobe Degeneration-Based on the Aspects of the Phylogenetic and Ontogenetic Processes. Dementia and Geriatric Cognitive Disorders 1999; 10(suppl 1): 50-54.)